

ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』 (その 3)

Pujangga Ranggawarsita's *Serat Paramayoga* (3)

豊田 和規 訳

Kazunori Toyoda

新島学園高等学校

Niijima Gakuen Senior High School

訳者まえがき

本稿では、前回に引き続き、ジャワの宮廷詩人ロンゴワルシト(Ranggawarsita, 1802—1873)の『スラット・パラマヨガ』(*Serat Paramayoga*、以下では『パラマヨガ』と略記する)の全訳を試み、同書を紹介する。本稿は前回の「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その2)」を引き継ぐものであり、本稿の翻訳者の構想する『パラマヨガ』の全訳は3部構成であり、全訳の最終部である第3部に当たるもので、(その3)と表記する。

ロンゴワルシトはジャワのスラカルタ王国で活躍した大文学者であり、『パラマヨガ』は、彼の代表作である長編の神話的王朝年代記『プスタカ・ラジャ』(*Pustaka Raja*、王の書)の序論にあたる。『パラマヨガ』は散文形式であり、ジャワ文字によって近代ジャワ語で書き記されている。「パラマヨガ」の語源は古代ジャワ語に由来する。「パラマ」(*parama*)とは、「最高の」を、「ヨガ」(*yoga*)とは「瞑想」を意味する。すなわち「パラマヨガ」とは「最高の瞑想」(エクスタシー)を意味する。

前回においても記したように、『パラマヨガ』の写本はスラカルタ王宮ササナ・プスタカ図書館とマングラヤ王宮レクサ・プスタカ図書館にそれぞれ1点ずつ所蔵されている。同書は19世紀中葉にロンゴワルシトによって執筆された[Florida 1993:160; 2000:213]。1906年に初めてジョグジャカルタのフォールヘン・ブニン株式会社(NV. Voorhen H. Boening)によって出版された。その後しばらくして、ジャワ文学の大碩学カマジャヤ(Kamajaya, 1915—2003)によってローマ字化されて、ジョグジャカルタのチュンティニ協会(Yayasan Centhini)から出版された[Kamajaya 1977]。この刊本は、2001年にオット・スカトノ(Otto Sukatno Cr.)によってインドネシア語に翻訳され、ジョグジャカルタのベントング・ブダヤ協会(Yayasan Bentang Budaya)から出版された[Otto Sukatno Cr. 2001]。同書はフォールヘン・ブニン社のテキストにも充分配慮しつつ、翻訳を試みている。



本稿では、前回と同じくオット・スカトノのインドネシア語版テキストをもとにしなが
らも、不明瞭な部分についてはカマジヤによるジャワ語テキストを随時照合して、
日本語による全訳を試みた。『パラマヨガ』全体の構成は以下の通りである。

序言

1. 預言者アダム
2. 預言者シス
3. シャイド・アンワル別名サン・ヒヤン・ヌルチャヒヤの生涯
4. サン・ヒヤン・ヌルラサの遍歴物語
5. サン・ヒヤン・ウナンの遍歴物語
6. サン・ヒヤン・トゥンガルの遍歴物語
7. サン・ヒヤン・グルがアジアの国を滅ぼす
 - (1) アンディニ牛
 - (2) ラタ・ワル・グジュヤ
 - (3) ティルバー魚 — バタリ・ウマ
8. 神々の系譜が次第に発展し広がっていく
9. ペルシャの西側の人々の信仰
10. ジャカ・スンカラ別名アジサカの誕生と遍歴
11. サン・ヒヤン・ジャガドナタが預言者イサと敵対する
12. サン・ヒヤン・ジャガドナタがジャワ島から移動する

今回は、前回に引き続き、『パラマヨガ』の第 11 章「サン・ヒヤン・ジャガドナタが
預言者イサと敵対する」から第 12 章「サン・ヒヤン・ジャガドナタがジャワ島から移
動する」までを紹介する。人名や地名などの固有名詞のローマ字綴りについては、カマ
ジヤのジャワ語テキストの綴り字に統一した。[]内はオット・スカトノによる注
記および訳注をもとにしたものであり、()内は本稿の翻訳者による注記である。

『パラマヨガ』全訳（その 3）

11 サン・ヒヤン・ジャガドナタが預言者イサと敵対する

伝えられるところによれば、預言者イサ(Isa、イエス)が大人になった時すなわち西暦
18 年、ヒンドゥー暦 707 年⁽¹⁾、アダム暦では太陽暦 5101 年、太陰暦 5253 年の時に⁽²⁾、
預言者イサはイスラエル国内およびイェルサレムで、宗教を広めた。その時、預言者イ
サは、友人たちや僧侶たち、修行者たちの語る忠告を、いつも考えていた。彼らは次の
ように語った。「おお、主よ、私たちの道標となるお方よ。あなたはいつも最善の行為

に忠実であられ、不忠実で誤った行いは一度もなさらず、保護者となり、この全世界で生ける神のすべての創造物を守るように義務付けられたお方よ。主が、神を自認する神々を滅ぼされますように。彼らは今まで、トゥングル(Tengguru)山の頂上にある天界に住んでおりました！」

預言者イサはその願いに同意することに気が進まなかった。いまだにアッラーからの命令がなかったからであった。けれどもその友人たちの提案は彼の気持ちに圧力をかけ続けたので、彼はその提案に従わなければならないと思った。預言者イサは大能を帯びたアッラーの命令を願い求めるために、瞑想した。その時また、人間としての姿かたちが消えた。彼はすでに肉体と魂を分離した。そして彼が願い求めていることが叶えられた。彼が願っている事態が生まれた。預言者イサは粘土をつかみ、握り、神々を破壊することのできる一羽の鳩を作った。最高神アッラーの意思が実現された。預言者イサの奇蹟が叶えられた。その粘土はたちまちのうちに、毒を持った鳩に変身した。その鳩は天高く飛び立ち、東に向かった。

思慮に富むサン・ヒヤン・ジャガドナタ(Sang Hyang Jagadnata)は、預言者イサが鳩の奇蹟を生み出したことを知っており、また、十分に理解していた。その鳩は非常に効き目のある毒を持っていた。サン・ヒヤン・ジャガドナタは語り、彼の配下の者すべてに準備をするように命じた。間もなく、その鳩は天空から降り、すぐにサン・ヒヤン・ジャガドナタの前に向かった。それは最高神アッラーの意思であった。その鳩は普通の人間が話すように語ることができた。

「おい、バタラ・グル(Batara Guru、サン・ヒヤン・ジャガドナタ)よ、知るがよい。この私の旅は他でもなく、預言者イサの意思を実現させるためであった。彼は真実の神アッラーの愛し子であり、聖霊とも名乗る。お前と神々の軍隊すべては、私の旅に従うように命じられた。お前たちは預言者イサに対面し、正統の宗教学についての教えを学ぶのだ。お前は、すべての創造物を作られた真実の神を礼拝するように命じられた。お前は不忠実にも、全世界の支配者などと自惚れてはならない。全世界の支配者は一人のお方だけであり、最高神アッラーであられる。お前が頑なであり、アッラーの意思に従わないのであれば、お前は確実に殺され、全世界が存在する以前の状態に戻るだろう！」と鳩は言った。

サン・ヒヤン・ジャガドナタが退避する

その鳩の言葉を聞いても、サン・ヒヤン・ジャガドナタは少しもひるまなかった。彼は、預言者イサの奇蹟によって作られた鳩が神々を殺すことができるとは、まったくばかげていることだと思った。それゆえサン・ヒヤン・ジャガドナタはひどく怒った。彼は子供たちに合図した。子供たちはその鳩をとらえようとして、襲いかかった。けれども何度も飛びかかって、鳩を捕えようとしたが、うまくいかなかった。まるで彼らは鳩の影を捕えようとするかのようなようだった。鳩はすぐに天空に飛び去り、神の子供たちも鳩を追って天空に飛び去った。しかし鳩の飛ぶ高さを超えることのできる者は一人もいな

かった。間もなく、鳩の嘴や耳、尻から毒が出てきて、風の粒子にあたって、四方に広がり続けた。その毒は雨のように激しく降った。鳩を追いかけていた神々は、毒が落ちてきた時、すべての者は意識を失った。鳩に近づくことのできる者は一人もいなかった。

鳩はぐるぐる回りながら飛んで、サン・ヒヤン・ジャガドナタが作った天界・天国の上に輪を作った。彼は毒を放つことを少しもやめなかった。その毒は、天界の中にいたサン・ヒヤン・ジャガドナタや天人・天女たちに当たった。天界のあたり一面に毒が散らばり、すべての者は悲鳴を上げ、猛毒の毒気にこらえきれずに病気になった。その毒の強烈さは、火の激しさの10倍あるかのように、さらに数倍はあった。

その毒はインド国の全域に均等に落ちた。都市にいる人々も村にいる人々も多くのが、その毒に当たった。その時、インド地域はものすごい災厄に見舞われた。サン・ヒヤン・ジャガドナタはひどく不安になり、恐れた。彼とその一族はトゥングル山にあった天界を離れた。彼らは天界を通過して、南東側に向かった。彼らはインド国外に逃れようと思った。しかし旅の途中で、上をぐるぐる回りながら飛んでくる鳩に追いかけられ、絶えず毒を落とされ続けた。その時、神々はものすごくひどい困難に見舞われた。サン・ヒヤン・ウィスヌ(Sang Hyang Wisnu)だけが無事であり、その毒に当たることはなかった。彼自身は神でありながら、知力においては超越しており、アッラーを崇拝し、預言者イサはアッラーの使徒、愛し子であると信仰しているからである。サン・ヒヤン・ウィスヌが神々と逃げたのは、彼の父に従ったに過ぎなかった。

サン・ヒヤン・ジャガドナタと天人・天女たちはインドの海を通過して、インドの地の南東側にある、まだ誰も住んでいない島に到達した。その島は、東から西へ長くの伸びた形をしており、スマトラ島と呼ばれていた。けれどもその当時、スマトラ島はジャワ島とまだひとつに繋がっていた。毒鳩はまだ追いかけてきたが、サン・ヒヤン・ジャガドナタは、自分には神霊力の強い戦士の子がいることをようやく思い出した。彼はすぐに命令をあたえた。

「おい、ウィスヌ。私は天界からここまで逃げてきたが、あの鳩はまだ追いかけている。我が子が私たちを助けるのだ！」

サン・ヒヤン・ウィスヌは初めから、鳩を打ち負かすことができると思っていた。けれども彼は父の意向に先んじて行動することを恐れた。そういうわけで、彼が命令を受けた時、彼は武器チャクラ（車輪）を持ってきて、瞑想して、肉体と魂を分離した。その時、武器チャクラは放たれ、鳩に命中した。その鳩はスマトラ島にあるパダン(Padang)の地のムラピ(Merapi)山の背後の上に落ちた。その時、鳩の姿は消えたと同時に毒の池に変わった。鳩が落ちた時、大砲のような轟く音がして、地震や大災害が起こった。辺りは真っ暗になった。地震が起こり、暴風が吹き、暗くなり、一千もしくは数千の災害が同時に続いた。預言者イサの奇蹟から生まれた鳩が消えてしまった証として、三日三晩、暗闇が続いた。その時、天人・天女たちは怖くなって縮み上がった。

災害が続いた後、太陽は以前のように、再び明るい光を放ち始めたように見えた。辺りは非常に暑くなった。天人・天女たちはすべてのどが渴いた。彼女たちは飲み水を探

そう思った。パダンの地のムラピ山の背後に澄んだ光を発する水のある池があるのを目の当たりにして、天人・天女たちもサン・ヒヤン・ジャガドナタも、疑念を抱いた者はいなかった。あらゆる礼儀や恥じらいの気持ちを忘れて、彼らは池の水を飲むために、我先にと争った。その時、天人・天女たちはすべて池の端で散り散りばらばらになって死んでしまった。

その間、サン・ヒヤン・ジャガドナタも水を飲みすぎた。けれども喉に達した時、水が非常に熱く感じ、すぐに口から吐き出してしまった。毒が吐き出された。けれどもサン・ヒヤン・ジャガドナタの喉には白い縞ができてしまった。サン・ヒヤン・ジャガドナタは座ったままだった。天人・天女たちの体は散り散りばらばらになっており、すでに死体になっているのを見て、彼はひどく悲しんだ。一人だけ生き残っていた。サン・ヒヤン・ウィスヌだけがまだ生きていた。その時、サン・ヒヤン・ジャガドナタは自分が、チュプマニク・アスタギナ(Cupumanik Astagina)の中に入っている世界の生命の水である魔法の宝物ティルタマルタ・カマンダル(Tirtamarta Kamandalu)を所有していることを思い出した。すぐに蓋を開け、天人・天女たちの唇に生命の水をふりかけた。彼らはすべて再び起き上がり、ただ夢を見ていただけのように思った。サン・ヒヤン・ジャガドナタの喉には白い縞模様があったので、その時以来、サン・ヒヤン・ジャガドナタはサン・ヒヤン・ニラカンタ(Sang Hyang Nilakantha)と呼ばれた。

その後、天人・天女たちに伴われて、サン・ヒヤン・ジャガドナタは心を和ますため、心の癒しを求めて、東に出かけた。サン・ヒヤン・ジャガドナタは島の山並みや浜辺の景色を見て、非常に楽しんだ。島の景色が非常に美しかったからである。最東端の国境すなわち、その当時はまだジャワ島と繋がっていたバリ島に到着すると、サン・ヒヤン・ジャガドナタは、広さとは釣り合わない、非常に長い島すなわちジャワ島に出くわしたので、非常に驚いた。サン・ヒヤン・ジャガドナタは神々に次のように言った。

「おい、神々よ。この島は狭いが、非常に長いので、ダワ(dawa、「長い」を意味する)にちなんで、この島をジャワ(Jawa)と名付けるがよい。」

神々は同意しただけだった。それこそが、この島がジャワ島と名付けられた云われである。しかしその当時、それをそのように呼ぶ者は神々だけであり、まだそれほど有名ではなかった。

その島に名前をあたえた後、サン・ヒヤン・ジャガドナタはすぐに西に戻った。しばらくの間、マヘンドラ(Mahendra)山で休んだ。その山は後に、ラウ(Lawu)山と呼ばれる。けれどもその時はまだ名前がなかった。その山を名付ける者がいなかったからである。サン・ヒヤン・ジャガドナタはその山の上でレトナ・ドゥミラー(Retna Dumilah)を開け、天国・地獄の絵を開陳した。それからサン・ヒヤン・ジャガドナタとその一族、妻およびすべての子供たちはマヘンドラ山の頂に天界を築き、そこに住んだ。

ところで『ジタブサラ』に記されているように、サン・ヒヤン・ジャガドナタの天界はガルガ・ドゥミラー(Ngarga Dumilah)別名ジョングラン・サラガ(Jonggrang Salaga)と名付けられた。間もなく、サン・ヒヤン・ジャガドナタと共に逃げた天人・天女たちもす

べてガルガ・ドゥミラーの天界にやって来た。そして天人・天女たちはティルタマルタ・カマンダルを飲むように命じられた。それはチュプマニク・アスタギナの中に入っており、パダンの地のムラピ山で起こった出来事のように、死ぬことはない。天人・天女たちはすぐに飲んだ。しかしティルタマルタ・カマンダルの水はいまだに尽きたことはない。その水はいつも箱を満たしているように見えた。サン・ヒヤン・ジャガドナタと神々がすべてインドのトゥングル山の山頂の天界から逃げて、ジャワ島にやって来て、マヘンドラ山の山頂に天界を築いたのは、前に述べたように、鳩を作り出した預言者イサの奇蹟が叶えられた年と時を同じくしていた。

アジサカ(Ajisaka)

伝えられるところによれば、インドの地のスラティ(Surati)王国の王プラブ・イワサカ(Prabu Iwasaka)は、サン・ヒヤン・ジャガドナタとその一族すべてがトゥングル山からジャワ島へ移動したという噂を耳にした。彼らはマヘンドラ山の山頂に天界を築いたという。その後、イワサカ王は王座を、ジャカ・スンカラ(Jaka Sengkala)という名の子供[皇太子]に譲った。ジャカ・スンカラは後に王になり、プラブ・イサカ(Prabu Isaka)別名プラブ・アジサカ(Prabu Ajisaka)と称した。そしてプラブ・イワサカはまた神に戻り、バタラ・アンガジャリ(BatharaAnggajali)と名乗った。彼はすぐにサン・ヒヤン・ジャガドナタを追って、ジャワ島へ行った。

ジャカ・スンカラが父に代わってアジサカの称号でスラティ国の王になった時は、ヒンドゥー暦 722 年、アダム暦によるならば、太陽暦 5108 年、太陰暦 5260 年に当たる。一方、西暦によるならば、ようやく 25 年になったばかりである。

バタラ・アンガジャリはガルガ・ドゥミラーの天界に到着すると、彼と彼の父バタラ・ラマヤディ(Bathara Ramayadhi)はサン・ヒヤン・ジャガドナタによって、また武器を作るように命じられた。武器を作っている時、彼らはチャンドラムカ(Candramuka)山の山頂にいた。その山は後にムラピ山と名付けられ、ジャワ島にある。武器が作り終わるとすぐにその武器はサン・ヒヤン・ジャガドナタに献上された。それらすべてはサン・ヒヤン・ジャガドナタの心を喜ばせた。

バタラ・カラ誕生の起源(Asal Mula Kejadian Bathara Kala)

ある日、サン・ヒヤン・ジャガドナタと王妃デウィ・ウマ(Dewi Uma)がアンディニ牛(Lembu Andini)に乗って、天空を巡回した。夕暮れを迎えた時、彼らはジャワ島の北側の海[ジャワ海]の上に到着した。夕暮れ時、雲に光が当たって、そこはますます美しく見えた。それでサン・ヒヤン・ジャガドナタは性欲を抑えることができなかった。その時もサン・ヒヤン・ジャガドナタは王妃と性交したいと強く願った。彼の欲望はもはや抑えることができなかった。一方、王妃は彼と性交したくはなかった。彼女は、アンディニ牛の背の上で、甘言を語り、愛の睦合いを行うのは、非常に恥ずかしいと感じたからであった。彼女はサン・ヒヤン・ジャガドナタに天界に戻るまで我慢するようにお

願いした。しかしサン・ヒヤン・ジャガドナタはまだ相変わらず欲望の虜になっていた。彼はすぐに欲望を成し遂げたかった。彼は妻を引き寄せ、膝の上に乗せた。しかし性交を始めようとした時、妻はすぐに逃げた。けれどもサン・ヒヤン・ジャガドナタの精液はすでに発射されて、海の真ん中に落ちた。

神々を創造する御業を行うことはアッラーの意思であった。その精液が落ちた時、凄まじい大砲のような轟く音がして、全世界に広がった。海水は煮えたぎり、荒れ狂った。その時、王妃はサン・ヒヤン・ジャガドナタに次のように言った。

「おお、主よ、我が夫よ。いつも全世界に影響を及ぼし、あらゆる生き物に崇拜され、礼拝されているお方よ。あなたは、習わしからまったく遠く離れているように思われます。それで性欲を抑えることができず、どこでも甘言を語り、愛の睦合いを行おうとします。ダナワ（鬼神の一族）のように礼儀に気を使いません！」

その時にも、王妃デウィ・ウマに呪いがかけられた時のように、サン・ヒヤン・ジャガドナタの牙が伸びた。その出来事を経験して、サン・ヒヤン・ジャガドナタはひどく驚いた。それで彼は立ち止まり、驚きのあまり、何もすることができなかった。心の中で彼は痛く悲しみ、大きな屈辱感に耐えた。彼らはガルガ・ドゥミラーの天界に帰った。彼の作った天界に帰るとすぐに、サン・ヒヤン・ラッドウワクダ (Sang Hyang Raddhuwakdha) という名の称号を使いたかった。彼は痛手を負い、ラクササ（ダナワ、鬼神の一族）のように牙を持つようになったからである。

伝えられるところによれば、カマ・サラ（Kama Salah）[誤った精液]は燃える火の光と共に、先と終わりの定かではない、至る所に広まり、もの凄い異変や混乱や騒動が生じた。そのため周辺の一帯は真っ暗になり、すべてを包み込んだ。凄まじいばかりの騒乱の音は天界まで聞こえ、神々を恐怖に陥れた。彼らは共に海に近づいて見た。海には太陽の光のように燃えて、光り輝く一つの物体が見えた。神々は、その物体の姿は本当は何であるのかを推測することはできなかった。彼らはすぐに帰って、サン・ヒヤン・ジャガドナタに知らせた。

サン・ヒヤン・ジャガドナタの答えは次のようなものであった。

「おい、神々よ。知るがよい。燃え輝いて見えるものが、混乱を巻き起こしているのだ。名はカマ・サラという。お前たち皆の者よ、様々な武器を使って攻撃し、すぐに消滅させるのだ！」

神々は戦う準備をして様々な武器をもって、素早く出発した。目指すところに到着して、その燃えている物体を葬り去ろうと行動した。しかし使用したすべての武器は役に立たなかった。まったく信用することができなかった。奇蹟を作り出すアッラーの意思によるものであり、それらすべてのことは、アッラーの威力は人間によって想像したり推測したりできないことの証であった。時を同じくして、カマ・サラはやがて姿を変えて非常に大きなラクササになった。彼に向けられたすべての武器は、まるで彼がますます大きく完全に成長するまでの糧のようなものであった。その後、そのラクササは神々のいる所にやって来た。彼は、父親は本当は誰なのか尋ねた。彼の声は雷鳴のよう

に轟き渡り、神々はひどく驚いた。彼らは避難するためにあちこちに逃げまどい、ガルガ・ドゥミラーの天界に戻り、安らぎを覚えた。けれどもカマ・サラーは神々がどこへ逃げようとも付いてきた。

サン・ヒヤン・ジャガドナタの前に到着すると、神々は、どの種類の武器もカマ・サラーには効き目がないことを、慌てふためいて報告した。彼を殺すことはできない。それどころか反対に彼が神々を追いかけた。しばらくするとカマ・サラーがサン・ヒヤン・ジャガドナタの前に対面するためにやって来て、座った。神々すべては後ろに離れた。

「おお、おお、おお、お前は誰だ。非常に小さいが、光り輝いていて、大胆にも私の一番近くに座っているとは？」とカマ・サラーは尋ねた。

サン・ヒヤン・ジャガドナタは不安も疑いも感じず、静かに答えた。

「知るがよい。この私は全世界の王であり、すべての生きているものによって神として崇められている。私の名はサン・ヒヤン・ジャガドナタだ！」

「もしそうであるならば、お前は私の父が本当は誰なのか教えてくれるか？」とカマ・サラーは言った。

「この私が全世界によって神として崇められているからだ！」とサン・ヒヤン・ジャガドナタは答えた。「もちろん私はお前の父が本当は誰なのか知っている。しかしもしお前がお前の父が誰なのか強いて尋ねるならば、お前は私に対して敬意を表さなければならない。もしそうでなければ、私はお前に真実を教えることはないだろう！」

カマ・サラーはサン・ヒヤン・ジャガドナタの意向に従い、すぐに敬意を表した。腰を曲げた後、彼の髪の毛はすぐに刈り取られた。カマ・サラーは驚き、すぐに立ち上がった。けれどもサン・ヒヤン・ジャガドナタは素早く行動し、カマ・サラーの二つの牙を握り、すべてを切り取った。その間、彼の舌を武器で突き刺した。すべての「毒」はすぐに体外に出た。その後、彼を自由にした。カマ・サラーは一箇所に座った。知恵も力もすべて失ってしまった。

サン・ヒヤン・ジャガドナタの神霊力により、体外に出た毒を二本の牙の先に注いだ。その時、二本の牙は二振りのクリス（短剣）に形を変えた。『ジタプサラ』に記されているように、右の牙はコンタ(Konta)と名付けられた。一方、左の牙はパソパティ(Pasopati)と名付けられた。そういうわけで、昔の時代の人々は、武器を使って戦闘をしている時、バタラ・カラの牙を競わせている、と名付けた。それは、二本の牙がクリスに成り代わったことに由来する。

その時、サン・ヒヤン・ジャガドナタは次のように言った。

「おい、カマ・サラーよ、知るがよい。実は私がお前の父なのだ。今お前に私はバタラ・カラ(Bathara Kala)の名をあたえる。お前がこの世界に誕生したのは夕暮れがやって来た時だったからである。それ以外に、私はお前にヌスワカムバンガン(Nuswakambangan)に住む場所をあたえる。やがて後日、私はお前に食べ物として供物をあたえる」バタラ・カラはそれを拒むことはできず、すぐにヌスワカムバンガンに向かって出発した。そのヌスワカムバンガン島はヌスワパウィニハン(Nuswapawinihan)とも

ヌスワ・トゥムビニ(Nuswa Tembini)とも呼ばれ、やがて後日、その島はカリムン・ジャワ(Karimun Jawa)と呼ばれ、ジュパラ(Jepara)地方の北側にある。

ウマ女神が呪いの罰を受ける(Dewi Uma Terkena Sawab Bala)

バタラ・カラが立ち去ると、サン・ヒヤン・ジャガドナタは天界の玉座に戻った。彼は王妃ウマ女神に対して激怒した。彼は傷を受け、牙を持ち、ラクササの子供をもうけたからである。それらすべては、他でもなく妻のウマ女神の行為によるものである。彼が天界の都に到着すると、王妃は床に触れるまでお辞儀をして、彼を迎えた。その時、彼女の髻(まげ)が引っ張られた。それで彼女の髪は乱れて散り散りばらばらになった。それから彼は彼女をつかみ、彼女の頭をさかさまにして地面に落とした。王妃は非常に激しく声を上げ、心を乱してうめいた。「おお、主よ、我が夫よ。全世界で神として崇められている者よ。なぜあなたはあなたの創造物に対して虐待行為をなさるのですか。おお、主よ。あなたが私を許そうとしないならば、私が犯した過ちや災難に対して、どんな苦痛をも受けましょう。私の過ちについて、あなた以外に許すのにふさわしいお方はおられるでしょうか！」

サン・ヒヤン・ジャガドナタの怒りの感情はもう抑えることはできず、いつも彼を愛していた妻の悲鳴や呻き声を聞いても、もはや愛情を持つことはなかった。それどころか非常に激しい呪いの言葉を発した。

「おい、ウマよ。お前は美の女神と呼ばれるにふさわしい。しかしお前の髪の毛は掻き乱れており、お前の叫び声は女ラクササ（女の羅刹）と変わるところがない。」

そのように語った後、ウマ女神は呪いを受けたかのように、彼女は女ラクササに変身した。彼は彼女を解き放った。ウマ女神は一箇所に座っているだけで、もがきながらも力はなく、許しを求めて悲鳴を上げた。

妻の姿形が変わり、絶望して呻き声を上げるのを見た後、サン・ヒヤン・ジャガドナタは彼のすべての行為を後悔して気持ちがひどく不安になった。彼女に対する憐れみの気持ちが生まれ、次のように言った。「おい、ウマよ。もう静まるのだ。泣くのではない。アッラーの意思による運命を受け入れるのだ。お前は女ラクササに変わったが、それはただ外面的な姿に過ぎない。お前はバタラ・カラの妻になるだろう。お前の繊細な体は相変わらず私の妻だ！」

その時もサン・ヒヤン・ジャガドナタは自らの過ちをひどく後悔した。彼は瞑想し、アッラーの意思であるものであればどんな忠告をも求めた。彼は肉体と魂を分離し、その時は、人間的な姿形は消えた。彼自身を包み込んで輝く光以外は何も見られなかった。それすべては、彼の願い求める祈りが叶えられた証拠（あかし）であった。願い求めるものは何でももたらされた。彼が思考を集中させたものが生まれ出た。その時、サン・ヒヤン・ジャガドナタは伯父のサン・ヒヤン・チャトゥル・カナカ(Sang Hyang Catur Kanaka)にデウィ・ラクスミ(Dewi Laksmi)という妻がいて、すでに3人の子供がいるこ

とに目を付けた。サン・ヒヤン・チャトゥル・カナカはサン・ヒヤン・ウナンの兄弟であるサン・ヒヤン・プルバ・ウィセサ(Sang Hyang Purba Wisesa)、別名サン・ヒヤン・ダルマジャカ(Sang Hyang Darmajaka)の息子であった。デウィ・ラクスミの美しさは比類がなく、まだ女ラクササに変貌しない時のデウィ・ウマと、びんろうじの実を二つに割ったように、瓜二つであった。デウィ・ラクスミが現れるように思念を集中させると、すぐにその場所にやって来た。『ジタプサラ』に記されているように、デウィ・ウマの魂がデウィ・ラクスミに移り移るよう思念を集中させた。一方、デウィ・ラクスミの魂はデウィ・ウマに移り移るよう思念を集中させた。

すでにアッラーの意思は定まった。サン・ヒヤン・ジャガドナタが願うものは何でも現実のものとなった。その時、二人の女神は互いに入れ替わった。魂をお互いに交換し合った後、サン・ヒヤン・ジャガドナタは瞑想を終了した。そして次のように言った。

「おい、女ラクササの姿に移り移ったラクスミよ、私はお前にバタリ・ドゥルガ(Bathari Durga)の名をあたえる。私はすでに承知しているが、お前は我が息子シ・カラ [バタラ・カラ] の妻となるのだ。一方、ラクスミの体に移り移ったウマよ、お前はウマイ(Umayi)と名乗るがよい！」

命令を受けた女神たちは準備が整っていることを告げた。バタリ・ドゥルガはヌスワカムバガンに行くように命じられた。そしてバタラ・カラによって受け入れられた後、彼女は彼の妻となり、夫婦生活は仲睦まじいものであった。

12 サン・ヒヤン・ジャガドナタはジャワ島から移動する

伝えられるところによれば、サン・ヒヤン・ジャガドナタと神々は 15 年間、マヘンドラ山、別名ラウ山の頂上に天界を築いたのは、ヒンドゥー暦では 730 年、アダム暦によれば、太陽暦 5116 年、太陰暦 5268 年、西暦では 33 年のことであった。サン・ヒヤン・ジャガドナタは預言者イサが身罷ったという噂を聞いた。そしてサン・ヒヤン・ジャガドナタは一族すべてを引き連れて、ジャワ島から再びインドの地に戻った。天人・天女たちは皆、素早く彼らに付き従った。残されたものは一つもなかった。彼らはカンディ(Kandhi)島の域内に属するクラサ(Kelasa)山に降り立った。そこはインドの南側にあるガルンカ(Ngalengka)王国の領内にあった。後日、現地の人々はシングラ(Singgela)島と呼んだ。アラブ人はスラン(Selan)島と呼んだが、ヨーロッパ人たちはスロン(Selan) [スリランカ] と呼んだ。

このカンディ島で、サン・ヒヤン・ジャガドナタはクラサ山の山頂に天界の玉座を築いた。それは黄金や宝石、様々な色のダイヤモンドで飾り付けがされ、それらが巧みに組み合わされていて、非常に美しかった。インドの地の王たちの多くはそのクラサ山の山腹に礼拝所を築いた。

サン・ヒヤン・ジャガドナタはしばらくの間、クラサ山の山頂の天界に留まったが、その後、トゥングル山の頂上にある天界に再び移動した。トゥングル山の山頂の天界に

到着すると、再び天国・地獄の箱を開け、その中のすべてのものと共に開陳された。移動する前と同様に、すべては欠けることなく揃っていた。それ以来、サン・ヒヤン・ジャガドナタはその一族および天人・天女と共にインドのトゥングル山、別名ヒマラヤ山にある天界に居住する。『ジタブサラ』に記されているように、ジョン格林・サラガやパパールヤワルナ(Paparyawarna)、テジャマヤ(Tejamaya)、ガルガ・ドゥミラにあったサン・ヒヤン・ジャガドナタの天界は永遠に存在する。

インドおよびその周辺の王たちはサン・ヒヤン・ジャガドナタがトゥングル山の天界に戻ったことを聞いて、幸福な気持ちになり、サン・ヒヤン・ジャガドナタを神のように崇め、以前と異なることはなかった。すでに壊されたトゥングル山の山腹の礼拝所はすべて、それらを所有していた王たちによって、再び元通りに改修された。毎年、年の初めに、王たちはすべてトゥングル山の山腹に集まり、慣習通りに、様々な供物を献上し、礼拝を捧げた。

サン・ヒヤン・カネカプトラ / ナラッド(Sang Hyang Kanekaputra / Naraddha)

話は変わって、サン・ヒヤン・ヌルラサの孫であり、サン・ヒヤン・プルバウイセサ、別名サン・ヒヤン・ダルマジャカの息子であるサン・ヒヤン・チャトゥル・カナカ(Sang Hyang Catur Kanaka)には5人の子供がいたという。1番目の子供はサン・ヒヤン・カネカプトラ(Sang Hyang Kanekaputra)という。2番目の子供はサン・ヒヤン・プリタンジャラ(Sang Hyang Pritanjala)といい、3番目の子供はデウィ・ティクスナワティ(Dewi Tiksnawati)という。その3番目の子供はデウィ・ラクスミから生まれたが、デウィ・ラクスミはすでに前で語ったように、サン・ヒヤン・ジャガドナタによってデウィ・ウマの代わりとして求められたので、消えてしまった。そして4番目の子供はサン・ヒヤン・チャトゥルワルナ(Sang Hyang Caturwarna)といい、末の子供はサン・ヒヤン・チャトゥルボジャ(Sang Hyang Caturboja)というが、彼の母は異なる。デウィ・ラクスミが消えて、サン・ヒヤン・チャトゥルカナカは妻のあらゆる態度や行為を思い起こしては悲しみに暮れた。彼の目の前にいつも影が映るので、彼は彼女を慕い求めた。デウィ・ラクスミはまた、最上の女性として完璧でもあった。サン・ヒヤン・チャトゥルカナカは、幾多の苦しみと悲しみに見舞われており、それらの重荷を担うほど強くはなかった。そして彼は苦難のゆえに、疼き、呻いた。

やがて彼は神が定めた運命の意思に委ねた。彼は妻を慕い求めるたびに、精液が出た。それはすぐにリングマニク(Linggamanik)と呼ばれる宝石箱に入れられた。それは彼の父サン・ヒヤン・ダルマジャカがあたえた宝物であった。しばらくして後、彼の心は妻への恋慕の情から解き放たれた。リングマニクは最年長の子供の宝物になるように、サン・ヒヤン・カネカプトラに渡された。サン・ヒヤン・カネカプトラによってリングマニクはしっかりと握りしめられて、決して手放すことはなかった。

サン・ヒヤン・カネカプトラはあらゆる神霊学や戦術に非常に優れており、また非常

に思慮に富んでいた。それゆえ父さえ負かすことができた。そういうわけで、彼は一度もサン・ヒヤン・ジャガドナタに謁見しようとは思わなかった。しかし彼はいつも大海で熱心に修行していた。彼は水に濡れることはなく、水の中に沈むこともなかった。リンガマニクの宝石は一度も手放すことはなく、常に握り続けていた。何年かすると、サン・ヒヤン・カネカプトラの虹もしくは光が輝き、ジョン格林サラガの天界から見ることができた。サン・ヒヤン・ジャガドナタは神々に、その光を放つ虹は本当は何であるのかを調べるように命じた。神々はすぐに出発した。目的地に到着すると、海の上で一人の高僧が修行していた。神々は天界に戻り、その光を発する虹を作る者は海の上で修行している高僧であると知らせた。

「おい、神々よ。その修行している高僧を、すぐに私に謁見させるように、こちらに呼ぶのだ。もし彼が望まないならば、お前たちの知恵に任せる！」とサン・ヒヤン・ジャガドナタは言った。

神々は準備ができたと言って、例の修行中の高僧のいる場所に再び出発した。そのうち、彼らはサン・ヒヤン・ジャガドナタの命令を伝えた。

「おい、修行中の高僧よ。私たちはサン・ヒヤン・ジャガドナタの命令を持ってきた。お前は天界へ行って、彼に謁見するように命じられている」

サン・ヒヤン・カネカプトラは聞いていないふりをして、一言も語らなかった。彼は熱心に修行しているふりをした。神々は何度も命じたが、相変わらず彼は関心を示さなかった。それらすべてのことは神々の怒りを引き起こした。サン・ヒヤン・ジャガドナタに謁見させるために、力を尽くして大勢の神々の頭に載せて連れて行こうとした。しかし神々は彼を連れていくことができるどころか、髪の毛一本さえ引きずっていくことができなかった。神々は畏れ、苛々した。大勢でサン・ヒヤン・カネカプトラを攻撃した。彼を様々な方法で苦しめたが、効果がなく、彼は関心を示さなかった。それどころか彼は相変わらず熱心に修行するふりをした。神々は彼を強要して連れていくほど強くはなかったので、天界に戻り、そのことをサン・ヒヤン・ジャガドナタに報告した。

神々の報告を聞いて、サン・ヒヤン・ジャガドナタは激怒した。そして彼は一人で彼のもとにやって来た。目的地に到着すると、彼は次のように語った。

「おい、修行中の高僧よ。お前は何を望んで、熱心に修行しているのだ。お前はあらゆる神霊術に長け、その熟練さはすべての神々に超越しているのではないか？」

サン・ヒヤン・カネカプトラは相変わらず関心を示さず、しっかりと修行を続けていた。その時、サン・ヒヤン・ジャガドナタは再び次のように語った。

「おい、修業中の高僧よ。お前が私に関心がなくとも、私はこの世界で神として崇められているので、お前が語らない望みが本当は何であるのか、すでにわかっている。お前は非常に高慢であり、心高ぶっている。お前自らが私のように、全世界で神として崇められることを願っている。しかしそれはお前が手を伸ばしてつかむことのできないものだ。お前が千年間修行しても無理だ。私は1日たりとも修行する必要はない。お前が私と同様になることは不可能だ。しかし私は全世界で神として崇められるように運命づ

けられているのだ。お前は私よりは若年だ。私よりも年長の者がいる。彼は天地であり、天地を包む光である。最年長の者は他でもなく、ヒヤン・ウィセサ(Hyang Wisesa)である。」

そのようなサン・ヒヤン・ジャガドナタの言葉を聞いて、サン・ヒヤン・カネカプトラは笑いながら次のように答えた。「私がカネカプトラだ。お前が説明する前に、お前は本当にサン・ヒヤン・ジャガドナタであり、地上を支配し、全世界の者たちによって神として崇められている神々の王であることは、私にはすでにわかっていた。しかし知るがよい。お前の知識はそれだけに過ぎず、生命に関する完全な学問を身に付けているとは言えないし、ジャティニン・トゥンガル(Jatining Tunggal)[アッラー]の真理に気を配り警戒しているわけではない。ヒヤン・ウィスサはなぜ最年長とみなされるのだろうか。彼が存在した時、甲高く響き渡る秘密の大鐘が鳴り響くような音が聞こえた。それは音の出所があるということだ。それは世界を支配する者が実際にすでに存在した証拠である。それで私は再び尋ねる。誰が実際に世界を支配していたのか？ そしてまた、まだ世界に何もなかった時に、そして天も地もなかった時に、それ以前に存在したものは何であったのか？ 誰が天と地を創造したのだろうか？ もしお前がこの私の言葉の秘密を知らないのであれば、真の完全な学問を知っていると言ってはならない。」

そのようなサン・ヒヤン・カネカプトラの言葉を聞いて、サン・ヒヤン・ジャガドナタは彫像のように苛々しながら立っていた。彼は彼の学問が完全ではないと思った。そして彼は非常に繊細で美しい言葉を使って、次のように言った。

「私の兄であるカネカプトラよ。今、私は私の学問が完全であることから遠いと思う。そういうわけだから兄よ、あなたは両親のように私のそばにいてほしい。私に完全なる学問を教えてほしい。あなたが語ったすべてのことが、どうか私の心の灯火となりますように。兄よ、すぐに私と一緒に天界へ上ってください。私は兄に、私が支配する神々や王たちを命令する権限を与えます。兄の命令に従わない者はいません！」

その言葉を聞いて、サン・ヒヤン・カネカプトラは次のように答えた。「おお、真にサン・ヒヤン・ジャガドナタは世界を支配し、世界中で崇められている王である。あなたの命令に対して私はただ感謝するばかりだ。他でもなく、あなたの兄である私はあなたの命令を行う準備ができている。私がサン・ヒヤン・プラメスティ(Sang Hyang Pramesthi、アッラー)の意思に従わないことは全くありえないことだ！」

サン・ヒヤン・カネカプトラが話し終わると、サン・ヒヤン・ジャガドナタは再び天界に帰った。サン・ヒヤン・カネカプトラは彼に従った。天界に到着すると、サン・ヒヤン・カネカプトラは、サン・ヒヤン・ジャガドナタがまだ知らない事柄についての学問を教えた。その後、サン・ヒヤン・カネカプトラは神々の指導者になった。彼はサン・ヒヤン・ナラッド(Sang Hyang Naraddha)と称したが、サン・ヒヤン・カネカプトラの名前を使い続けた。

6 種類の宗教と慣習の実行

伝えられるところによれば、ヒンドゥー暦 735 年、アダム暦では太陽暦 5119 年、太陰暦 5272 年、西暦では 36 年になったばかりの時、ペルシャやインド、中国およびその周辺の国々の王や高官たちはすべてトゥングル山の山腹に集まっていた。彼らは、聖典の戒律に記されているように、またこれまで行われてきた慣習に則って、神々を崇拝する時に供養するために様々な供物を持ち寄って祭壇に供えた。その捧げものはアスワメダ(Aswamedha)と名付けられた。その時、サン・ヒヤン・ナラッタが王や高官たちが集まっている場所に降りてきて、命令を伝えた。その命令は『ジタブサラ』に記されているように、次のような内容であった。

「おい、それぞれの祖国を支配し、礼拝の儀式を行っている王および高官たちよ。私がここへやって来たのは、あなた方すべてにサン・ヒヤン・ジャガドナタの命令を伝えるためだ。サン・ヒヤン・ジャガドナタの子供たちはすでに大きくなり、皆すでに大人になった。今や彼らはあなた方すべての礼拝方法として戒律を作ることを願っている。6 人の子供たちは 6 種類の宗教を創始する許可を得た。それらはやがてあなた方や軍隊および民衆の信仰となるだろう。あなた方すべての者は、自分自身の好みに従ってそれら 6 つの宗教のどれを選んでもよい。それぞれの宗教集団はパグル(Pangulu)すなわち宗教指導者を持たなければならない。それぞれの宗教の慣習は以下のように私が語った命令通りのものである。あなた方は、あなた方が支配する民衆にとって実践される慣習がどのようなものであるのかを見極めて決断しなければならない。あなた方は民衆を支配する義務がある統治者である。いずれにしろあなた方は王なのだ。宗教およびそれぞれの実践される慣習に相も変わらず忠節で、平穩無事な礼拝を行う人々よ。実践される条件は次のように、宗教ごとに慣習、戒律は異なる。

まず第 1 は、それぞれの宗教はパグルネ(Pangulune)すなわち宗教指導者がいなければならない。2 番目にトゥトゥグレ(Tetengere)すなわち印もしくは特徴がなければならない。3 番目はパヌムバヘ(Panembahe)すなわち礼拝されるものがなければならない。4 番目はラクネ(Lakune)すなわち慣習がなければならない。5 番目はタパネ(Tapane)すなわち修行を行う方法がなければならない。6 番目はアリ・ラヤネ(Ari-rayane)すなわち祝日がなければならない。7 番目はララガネ(Larangane)すなわち禁忌がなければならない。8 番目はウウナゲ(Wewenange)すなわちしてよいことがなければならない。9 番目はパパリネ(Papaline)すなわち関心を持ち、記憶しなければならないことがなければならない。10 番目はパンラヨネ(Panglayone)すなわち葬式がなければならない。11 番目はパリヤサネ(Paliyasane)すなわち遺体の埋葬方法がなければならない。12 番目はパムルヤネ(Pamulyane)すなわちすでに述べたようにそれぞれの人間は完全で尊敬されなければならない。それらすべてのことはサストラ(sastra)[聖典]に記されている通りだ。

1. おい、崇拝の儀式を行っているすべての者たちそしてサムボ教(Agama Sambo)を信仰している民および軍隊たちよ。宗教の指導者はプラマナ(Pramana)という名であり、日常生活のあらゆる事柄において、お前たちはワラン・アタガ(walang ataga)

「様々な種類の昆虫」という御印を使わなければならない。崇拝するための道具として

の宝石は「デン・アンゴ・バテ・バテ」(den anggo bate-bate)である。神像に対する礼拝方法について行わなければならない慣習は身の丈に合った行動をすることである。カルティカ(Kartika)月の時期ならば⁽³⁾、完全無欠なものを食べてはならない。パルグナ(Palguna)月の時期ならば、脇によって慎まなければならない。もし祝日ならば、非常に塩辛いものを食べてはならない。

禁忌は次の通りである。男系の祖母、伯(叔)父、伯(叔)母、義理の兄弟および孫と結婚してはならない。恋し合っている鳥を見てはならない。心臓を食べてはならない。すべて鉄からできているものを使ってはならない。チャンディ(霊廟)を壊してはならない。

行ってもよいことは次の通りである。女系の祖母、伯(叔)父、伯(叔)母、義理の兄弟および孫と結婚してもよい。薬のためならば、心臓を食べてもよい。もし道具としてだけ使うならば、鉄を使ってもよい。一組の夫婦は自殺することによって殉死してもよい。夫に従って殉死しない妻は髪を切るだけでよい。女は生まれた時、割礼をしてよい。妻に従って殉死しないならば、夫は割礼するだけで充分である。

結婚式を行っている時、バラド(baladho)を使わなければならない。男は jantra(糸車), wusu(回転機), likasan(糸巻き機), kukusan(蒸し器), iyan(籠), ilir(団扇), enthong(樽、桶)を使用しなければならない。一方、女は garu(熊手), waluku(鋤), pacul(鍬), linggis(金梃)を使用しなければならない。もし死んだならば、遺体は保護される。遺体はもち米の穂を灰にした水で洗い清める。もし気高く生きたい、もしくは人生において成功を望むならば、負債によらなければならない。

2. おい、崇拜の儀式を行なっているすべての者たちそしてブラフマ教(Agama Brahma)を信仰している軍隊および民たちよ。指導者はブラフマナ(Brahmana)という名である。日常生活においてエカル・トリスラ(ekal trisula)の御印を使わなければならない。それは王冠として使われる、三つ又の槍のような形をしたものであり、銅で作られている。礼拝されるものは、火および太陽である。慣習としてお互いに平穏を保たなければならない。

修行方法については、もしチトラ(Citra、チェトラ)月ならば、色々な葉からできた食べ物は食べてはならない。スラワナ(Srawana)月ならば、空もしくは上を向いてはならない。祝日ならば、非常に甘いものを食べてはならない。

禁忌は次の通りである。男系の祖母、伯(叔)父、伯(叔)母と結婚してはならない。熟した果物を食べてはならない。火を消してはならない。牛の肉を食べてはならない。すべてが錫からできたものを使ってはならない。

権利もしくは行ってもよいことは、女系の祖母、伯(叔)父、伯(叔)母と結婚してもよい。兄弟と結婚してもよい。男系もしくは女系の義理の兄弟および孫と結婚してもよい。乳母の子もしくは教師の子供と結婚してもよい。薬としてならば、牛の肉を食べてもよい。道具として使うならば、錫からできたものを使ってもよい。夫が死んだならば、妻は髪を切ってもよいし、月経が終わっているならば、殉死してもよい。一方、妻

が死んでも夫は殉死してはならない。一人っ子ならば、女の子も男の子も割礼してもよい。

結婚式を行っている時は、「バブダック」(babudhak)を使わなければならない。花婿の兄弟は花嫁の兄弟と楽しまなければならない。もし死んだならば、遺体は焼かれる。遺体は柘榴の葉が入った水で洗い清める。もし人生を気高く生きたい、もしくは人生を成功したいと望むならば、労働者となって働くしかない。

3. おい、崇拝の儀式を行っている者たちおよびインドラ教(Agama Indra)を信仰している民と軍隊よ。宗教の指導者はサクラナ(Sakrana)という名であることを知るがよい。日常生活については、エカル・バジュラ(ekal bajra)すなわち髻（まげ）を支える時に使われる、バジュラ(bajra, 槍)のような形をした木の芯を使わなければならない。山や月に向かって礼拝しなければならない。行動方法は、委ね、受け入れることである。

修行方法については、ナヤ(Naya、カサダ)月ならば、赤ん坊を腰に抱いてはならない。アスジ(Asuji)月ならば、性行為を行ってはならない。祝日ならば、非常に苦いものを食べてはならない。

禁忌は次の通りである。女系の祖母、伯（叔）父、伯（叔）母と結婚してはならない。男系の兄弟と結婚してはならない。盛りの来た最中の魚を捕獲してはならない。卵を食べてはならない。大地に汚物を投げ捨ててはならない。象を殺してはならない。銅から作られたものを使ってはならない。

権利もしくは行ってもよいことは、女系の兄弟、男系もしくは女系の義理の兄弟、孫と結婚してもよい。薬としてならば、卵を食べてもよい。道具として使うならば、銅でできたものを使ってよい。女は月経がなければ髪を切ってもよい。夫が一人っ子の男子ならば、妻は夫に従って殉死してもよい。同様に妻が一人っ子の女子ならば、夫は妻に従って殉死してもよい。女子は花嫁になりたいと願う時、割礼してもよい。男子は生まれたばかりであり、産婆が助けた子供ならば、割礼をしてもよい。

もし結婚するならば、シントレン(sintren, 手品)とエンジェル(enjer, 踊り)を使うのだ。女の兄弟たちは男の家族によって歓迎されなければならない。それらすべてのことは、ご馳走が実際に振舞われていることによって証しされる。もし亡くなれば、その遺体は洞窟の中に埋葬される。遺体は米の研ぎ水で洗い清められる。人生を気高く生きて成功したいと望むならば、炎のように燃え上がらなければならない。

4. おい、崇拝行っている者たちおよびウィスヌ教(Agama Wisnu)を信仰している民と軍隊よ。宗教指導者はラマナ(Ramana)という名である。日常生活では太陽の護符(ekal kalacakra)すなわちチャクラ（車輪）のような形をした輪を胸につけて使うのだ。その輪の中には、すでに古くなった扇葉椰子がある。水と雨に向かって礼拝しなければならない。断食をし、善行を行うのだ。

修行方法については、マンガスリ(Manggasri、ムルガシラー)月ならば、豚肉を食べてはならない。ジタ(Jita、ジイエスタ)月ならば、羊の肉を食べてはならない。祝日ならば、非常においしいものを食べてはならない。

禁忌は次の通りである。男系の祖母、伯（叔）父、伯（叔）母および兄弟と結婚してはならない。教師の子供と結婚してはならないし、また生命のあるものを殺してはならない。大鷲ガルーダ、野豚、馬、海亀、小亀、火食鳥を殺してはならない。ひどく酔いがまわるようなものを食べたり、飲んだりしてはいけない。青銅からできたものを使ってはならない。

女系の祖母、伯（叔）父、伯（叔）母と結婚してもよい。女系の兄弟や義理の兄弟、孫とも結婚してよい。教師の子供とも結婚してよい。薬として使うならば、酔いがまわるようなものを食べたり、飲んだりしてもよい。道具として使うならば、青銅からできているものを使ってよい。病気の女子は髪を切ってもよい。夫が戦争で亡くなった場合、女子は殉死してもよい。夫が戦争で死なないならば、女子は長い間充分に修行したからである。それゆえもう性交してはならない。男子も女子も、子供が気が触れていれば、割礼してもよい。

結婚式を行っているならば、パター(薬草)、一對のびんろうじの実、サスラハン(稲)、グヌガン(山のように盛り付けられた食物)を使う。花婿、花嫁の両親は一房のバナナの半分を食べなければならない。もし亡くなったならば、遺体は川に棄てること。遺体は花園の花の入った水で洗い清める。もし気高く生きたいと願うならば、放浪するのがよい。

5. おい、崇拝の儀式を行っている者たちおよびバユ教(Agama Bayu)を信仰している民と軍隊よ。宗教の指導者はビマナ(Bimana)という名である。日常生活においては、動物の護符(ekal pas)を使う。つまり動物のへその緒の形をした動物の皮を帯として締めなければならない。礼拝は風の来る方角や光を放つ雷鳴、星に向かって礼拝する。いつも上を見つめ、お互いに善行を行うこと。

修行方法は、プサ(Pusa、ポシヤ)月ならば、牛の肉を食べてはならない。ウィサカ(Wisaka、ウェサカ)月ならば、足の肉を食べてはならない。祝日ならば、非常に酸っぱいものは食べてはならない。

禁忌は次の通りである。男系および女系の祖母、伯（叔）父、伯（叔）母、義理の兄弟、孫と結婚してはならない。教師の子供と結婚してはならない。子供を持っている動物を捕えてはならない。ワデル[川魚]を食べてはならない。白粉を使ったり、爪を切ってはならない。銀でできたものを使ってはならない。チュラット（やもりの一種）やチチャック（やもりの一種）、トケック（やもりの一種）、蜘蛛を殺してはならない。

男系および女系の兄弟と結婚してもよい。薬としてならば、ワデルを食べてもよい。白粉を使ったり、道具としてならば、銀を使ってもよい。未亡人になったばかりの女は髪を切ってもよい。男は宗教の指導者になるならば、割礼をしてもよい。

結婚式を行っているならば、バトヤン(batoyang)を使わなければならない。花婿が花嫁の家に出かけたならば、花嫁の兄弟たちは幕を使って出迎えなければならない。幕を破ることができるならば、花婿の行列は進む。もし幕を破ることができなければ、行列は進んではならないし、戻ってもならない。花婿に付き従って進むことは、日を改めな

ければならない。もし亡くなったならば、遺体は遠く離れた寂しい場所に棄てる。遺体は雨水で洗い清める。気高く生きたいと願うならば、物乞いをするのがよい。

6. おい、崇拝の儀式を行っている者たちおよびカラ教(Agama Kala)を信仰している民と軍隊たちよ。知るがよい。宗教の指導者はカラナ(Kalana)という名である。日常生活については、男根の護符(ekal Purusalingga)を使わなければならない。男性器のような形をした象牙もしくは骨を首飾りとして使う。礼拝は非常に不思議なものなら何でもつまり木や石などに向かって恥じらいをもって行う。

修行方法については、マンガカラ(Manggakala、マガ)月ならば、旅行中であっても宿泊してはならない。パドラワナ(Padrawana、パドラ)月ならば、塩を食べてはならない。祝日ならば、辛いものを食べてはならない。

禁忌は次の通りである。年上の兄弟と結婚してはならない。教師の子供と結婚してはならない。種族やカーストが異なる者と結婚してはならない。例えば、ブラーフマナはワイシャその他と結婚してはならない。穴の開いている土地や牛のこぶのような丘のある土地を開いてはならない。犬やムカデ、サソリを殺してはならない。椰子の実を食べてはならない。金でできたものを使ってはならない。

権利は次の通りである。年下の兄弟と結婚してもよい。同じ種族、同じカーストならば、結婚してもよい。ブラーフマナはブラーフマナと、サトリアはサトリアと、ワイシャはワイシャと、ダヌジャ(ラクササ)はダヌジャと、ダネスワラ(資産家)はダネスワラと、スードラはスードラと、ラクササはラクササと結婚してよい。薬としてなら、椰子の実を食べてもよい。道具として使うならば、金から作られたものを使ってよい。

結婚式を行っているならば、ガルムパン(galempang、「横になる」の意)を使わなければならない。花婿の一族は花婿の一族と取っ組み合いしなければならない。敗れた者は退かななければならない。花婿の一行は普通ではないものを身に付けなければならない。もし亡くなれば、遺体は野生の動物に渡される。遺体はナツメの葉が入った水で洗い清められる。気高く生きたいと望むならば、ペテンをやるか、ものを盗むような悪行を行わなければならない。

おい、崇拝を行っている者たちよ。6種類の宗教の慣習をお前たちに委ねる。お前たちの好みに従って、どれを選んでもよい。お前たちは私がすでに命じた言葉を実行しなければならない。一つの宗教も信仰しない者は誰でも怒りと罰を受けるだろう。サムバ教徒ならば、槍を雨のごとく投げつけて罰する。ブラフマ教徒ならば、焼かれる。インドラ教徒ならば、土の中に埋められる。ウィスヌ教徒ならば、流されるか、沈められる。バユ教徒ならば、長い間吊るされる。カラ教徒ならば、野生の動物に渡される。」

サン・ヒヤン・バタラ・ナラッダの話が終わると、崇拝を行っていた王や高官たちはサン・ヒヤン・ジャガドナタのすべての命令を行う準備ができたと言って礼拝した。それはサン・ヒヤン・ナラッダが伝えた命令であった。その時、サン・ヒヤン・ナラッダはすぐに消えた。王や高官たちは供物を捧げ終えた。捧げものは軍隊に平等に分配された。彼らは解散し、それぞれの国に帰った。それぞれの国に到着すると、彼らは彼らの

支配下の民に対して、6種類の宗教について公平に伝えた。カラ教については、多くの者がシワー(Siwah)教と呼んだ。それこそが仏教[神の宗教]がインドおよびその周辺に広められた謂れである。

アジサカがジャワへ行く

伝えられるところによれば、ヒンドゥー暦でパンチャマカラ暦⁽⁴⁾から数えて768年になった時、また、アダム暦によれば、太陽暦5154年、太陰暦5206年、アジサカを名乗り、インドのスラティ王国の王であったプラブ・イサカは敵によって攻撃された。王は王国からすぐに逃げて、森に隠れた。森に着くと、彼の父親バタラ・アンガジャリに出会った。彼は父親から、まだ誰もいない島で修行するように命じられた。その島はインドの南東側にあった。王はすぐに誰もいない島すなわちジャワ島に向かって出発した。ジャワ島に到着すると、王は名前を変えて、ウムプ・サンカラ(Empu Sangkala)にした。

ここまでが、『スラット・パラマヨガ』に書き記されている物語である。その後の物語は『スラット・プスタカラジャ・プルワ』(*Serat Pustakaraja Purwa*)で語られることになる。(おわり)

訳注

- (1) ヒンドゥー暦はヒンドゥー教で使用される太陰太陽暦であるが、本書のヒンドゥー暦はアダム暦と同様に同書の執筆者ロンゴワルシトの創作であると思われる。
- (2) 本書で用いられる暦。太陽暦と太陰暦がある。人類の祖アダムが指導者になった年をもって、紀元元年とする。
- (3) 本文の12の月名はサカ(シャカ)暦の月名称に由来する。サカ暦はインド起源であり、ヒンドゥー・ジャワ時代にジャワでも使用されていた。サカ暦は太陽暦であり、現在もインドで使用されており、78年を加えると西暦紀年になる。
- (4) 本書で用いられる暦。サン・ヒヤン・マニックマヤすなわちバタラ・グル(シヴァ神)が世界の王になった時をもって元年とする。

参考文献

- Florida, Nancy K. 1993. Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Volume 1, Introduction and Manuscripts of The Karaton Surakarta. Southeast Asia Program (SEAP). Ithaca, New York: Cornell University.
- 2000. Javanese Literature in Surakarta Manuscripts. Volume 2, Manuscripts of The Mangkunagaran Palace. Southeast Asia Program (SEAP). Ithaca, New York: Cornell University.

- Kamajaya (Karkono Partokusumo).1964. Zaman Edan, Suatu studi tentang buku : Kalatida dari R.Ng. Ranggawarsita. Jogjakarta: U.P. Indonesia.
- _____ 1977. Serat Paramayoga. Yayasan “Mangadeg” Surakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.
- _____ 1985. Lima Karya Pujangga Ranggawarsita. Jakarta: PN Balai Pustaka.
- _____ 1993-1997. Serat Pustakaraja Purwa, Jilid 1-4, Yayasan “Mangadeg” Surakarta: Yayasan Centhini Yogyakarta.
- Mardiwarsito, L.1986. Kamus Jawa Kuna-Indonesia. Penerbit Nusa Indah: Flores.
- Otto Sukatno Cr. 2001. Paramayoga ; Mitos Asal Usul Manusia Jawa. Jogjakarta: Yayasan Bentang Budaya.
- Poerbatjaraka, Ng. and Tardjan Hadidjaja. 1952. Kepustakaan Djawa. Djakarta: Penerbit Djambatan.
- Prawiroatmodjo, S. 1981. Bausastra Jawa-Indonesia (Jilid I & II). Gunung Agung: Jakarta.
- Simuh. 1988. Mistik Islam Kejawen Raden Ngabehi Ranggawarsita, Suatu Studi terhadap Serat Wirid Hidayat Jati. Jakarta: Penerbit Universitas Indonesia.
- 青山亨. 1994. 「叙事詩、年代記、予言：古典ジャワ文学に見られる伝統的歴史観」『東南アジア研究』32(1):34—65.
- 豊田和規. 2003. 「『パラマヨガ』—宮廷詩人ロンゴワルシトの「ジャワ神統記」」『南方文化』30:193—210. 天理南方文化研究会.
- _____ 2004. 「ロンゴワルシトの『パラマヨガ』に見られるジャワの神々の系譜」『南方文化』31:91—107.
- _____ 2005. 「『プスタカ・ラジャ』に見られるジャワの王権の起源」『南方文化』32:49—67.
- _____ 2006. 「宮廷詩人ロンゴワルシト研究序説—ロンゴワルシトの予言書」『南方文化』33:43—66.
- _____ 2008. 「ジャワの宮廷詩人ロンゴワルシトの『スラット・チュンポレット』」『南方文化』35:79—99.

- 2017. 「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その1)」『東京外大
東南アジア学』22:73—116. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究
室.
- 2018. 「ロンゴワルシトのジャワ神統記『パラマヨガ』(その2)」『東京外大
東南アジア学』23:77-107. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室.